若者目線 魅力を新聞に

岡山市中心部で開催中の現代アート展「岡山芸術交流2022」（市などでつくる実行委主催）の魅力を若者目線でまとめた新聞が北区の表町商店街に展示されている。鑑賞した印象や来場者へのインタビューを織り交ぜながら、作品の楽しみ方や独自の解釈を発信している。27日まで。（高橋由大）

学生らまとめ 表町に展示 作品解釈、楽しみ方紹介

岡山芸術交流2022 Okayama Art Summit

「ジャーナルプロジェクト」と名付けた取り組みで、市内外の中高、大学別に5グループ計約20人が参加。取材で得た情報や写真をグループごとに1枚の新聞（縦115センチ、横85センチ）にレイアウトし、プリントしたパネルを商店街の2カ所に設けている。

総社市立総社中美術部は、出展作家のインタビューやランキング形式のお薦め作品を掲載。県立大デザイン学部の研究室は建築物とアートの関わりに注目した。屋久島おおぞら高（鹿児島県）のサポート校・おおぞら高等学院岡山キャンパスは、参加アーティストがアートの存在意義を訴えたトークイベントを記事にした。

大半のグループが取り上げたのは主会場・旧内山下小の教室を舞台にした作品「悪臭の詩」。部屋の全面が黒板仕様で、机には頭部や四肢のないオブジェが〝着席〟している。

後楽館高は壁や床が落書きされていることに着目し「他の作品と違い、参加者の手で作ることができる」と紹介した。ノートルダム清心女子大は、来場者の中には「怖い」「意図が分からない」との意見がある一方で、自身の過去を重ね「どこか心引かれる」と感じる人もいたと説明。「現代アートは自分を映し出す鏡のような存在」と考察している。

新聞を読んだ会社員尾ノ井一樹さん(36)＝中区西川原＝は「作品の切り取り方やレイアウトが違い、見比べるのが楽しい。面白そうな作品が取り上げられていて、ますます芸術交流に行きたくなった」と話した。

学生・生徒目線で岡山芸術交流の魅力をまとめた新聞

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。